八宗起原

釋迦實録

四

特
へ波13
1809
5-4

波門
號 1809
巻 3-4

八宗起原釋迦實録巻之四

東都　鈴亭谷峩譯述

二十二　耶輸陀羅女群疑を蒙る并提婆瀉慾を逞くせ

再説車匿が言上を群臣疑惑せざるも亀けまど玉簾の裡ふ屏風
閑しぬ。淨飯王のミ往昔感得しぬ靈夢より誕生の瑞
應奇特相師の勘文阿私陀仙が来然を示せし詞とのひ。彼
此思ひ合しぬふ。余も有るんと思し呂。敢て疑ひなかこと
亀く。件の所遺物を面穿ぬくバ。浄側ふ冊きまつるを。憍曇
弥夫人ミ新宮も。車匿の譚を聞ぬひて。斉一涙ふ昊竹の。
よゝと可ふ聲も揃まど。互ふ遺物の品々を。新ふ。當泛郎
ぬくバ亀居る女官群臣も。孰ゝ慈然ゝゝぬも亀し。當下淨飯

王い豫てより。浩る嘆たい覚剛ぞと。思しにぬくども。捕おん
追慕の陰うゐめ。沸聲口隠せぬひつ。悪多在らおい輪王の。
位も富も耳従大約活う生るもの。子故ふ選てふい常ぞうし。
貴きも賤たも推あべて。醜態愚痴の子とぞふも。愛慈むあしひ
あるふ。況て悪多い二十二相。八十種好具足して。聰明辯舌萬
技ふ達し。筋力も天下ふ亀双ある。麒麟咒あて在けるを。虎狼
蛇蝎の栖ある。深山幽谷ふ獨入ーと。他ふ見て忍びんや。朕も
彼処へ分登て。倶ふ道を学ぶべし。犍陟牽と宜つべ。耶輸陀
羅女も身と離して。喜も左子のおん頗を。尋まうらんと預ひぬふ
を。三光大臣推止めて。大王の沸退慕い。おん理ふいつども。君今
国を捨ぬ。善生王より連綿うる。おん血脈絶して。轉輪
王位。他の有とあーん。微臣們熟勘へ奉るふ。左子学道のおん

望い一朝一夕の義ふいひたで。什麼沸降誕の當日より。斉瑞
ふ測最多きい諸天擁護しぬふて。疑ふべくもいつねば。倘令
深山ふ住ぬふとも。猛獣毒蛇も害しー得ざーうん。預くい国家の
与ふ。大王慶懽を安めぬひ。左子の沸運を天ふ祭し。学道
流統しぬて。還幸しぬふ時。ことそ。候せぬくと。恭まんまべ大王
實ぬと思しーにて。耶輸陀羅女を諫めぬひつ。咸是神所為ある
ものを。人を行刑べうーいとて。車匿ふも舊のごく。犍陟を預
けぬひ。たるふの還るまで。左も右も。驚きべうーいと。命じぬひて。
眺をぞ賜ーける。車匿い再生の君恐を。怪ぶて大うとあーぎ。
躰て階下を退ーげ。此日より犍陟を。主の如くふ思ひつ。
幸月を経る程ふ。十二年立しー後ふ。左子学道しぬひて。王城
ふ還幸しぬひしー時。おん説法を聴聞して。犍陟と共倡ふ得悦

滅佛しぬるとぞ。続て浮屠王は大臣の。諫奏を容ぬひて。浮屠は停廢ぬ。猶も齋慮は穏ふ〳〵。太子は長食を送るべし。と爲將軍ふ命じぬ。爲將軍奉りて。道中の旅毎ふ。數萬人の夫役を課せて。某報絹帛黥〳〵。檀特山〳〵運だんと。頻ふ路を急つ。日を重ね月を經て。猶難まで到る〳〵。雲霧深く立覆ひて。登ることを能はざるを。衆人空〳〵立帰て。由を奏聞ぬるふぞ。大王后妃新宮は。若やと憑ふ思ひぬひ〳〵。太子の安否も。あ〳〵まち。弓。唐けて紀路を闇ちぬる。彼靈山は那方と。聞ぶふ胷の痛むの〳〵。あれを異く。嶮道〳〵ぬひ。魂う還事〳〵ぬふ。やうんと。候ば猶更久形の。空うち仰ぎて。花多の翼を羨ぬひ。風の日雨の夜。雲霜ふ。就ても。專想像。浮妄の軌〳〵。同も妄〳〵。實ふ楚辭てふ漢書ふ。樂きふ新ふ相知るとり。樂ふ莫哀きふ

生て別離より。哀きは莫とあり。国こそ異を人心ふ。異るこゝは無うゝまで。彫て三新宮は三時殿より。月景城ふ移て。住て。橋雲跡夫人ふ仕へつも。憂年月を送る役ふ。就中耶輸陀羅女を。太子出家の前の夜ふ。胎内の子前園ありて。六年過ねば生るべゝ。住。緯の異常を怪しむ。ふ。ぬひ〳〵ん詞を。別き奉〳〵。恐〳〵さふ。深〳〵も歎きふ。流〳〵。忘て過〳〵も然あるん。月水こそ見ね其後ふ。両三年を過ぬきども。敢て孕ゝ容もあゝ。産心地の勝ぎるは。間あゝ時あゝ。太子の上のゝ。想ひつゞけて慕ゝ。心の凝滞あるべ〳〵と。他咸いは自さゝも。然ふんめりと思ひつ。又一年深を經ぬる。夏の頃ふ。水浴て妊娠を覚〳〵。心中悄々地ふ。驚つ。醫ふ。太子の示〳〵ぬひ〳〵。内を今更稟ぎとも。人實事とは思ふまじ。年何いせんと。只一個心を苦〳〵

のふふも。太子のおん車を。忘雖てぞ被疲さり。其身のうへふ被
置ゆひし。太子の沛衣と沛遺物の。瑞路を身ふ添て。帳内ふ
の〳〵引篭。欲たふ鶴夜ゆひしゞ。涕々ふ腹帳ざこて。匿むと
さまど今ハたや。女官童女們も知りはまバ。大家疾き請り
つ〳〵太子沛出家ませ〳〵より。既ふ四年除りを經つるふ。男童き
身ふ流ゆひしハ。誰とら密通ゆひけん。日頃い貞女態て在せ〳〵
も。忠び雖きハ遠道うふ。去あゞ〳〵孰の間ゆ〳〵。己々動て在あゞ〳〵。
生るの眼を投まけり。猪も〳〵どうりふ正善あくも潛言と。
早くも橋曇弥夫人聞し。呂て。是ハ異し紀風流よ。捨も指つき
事あ〳〵じと。悄々地ふ虚実を糺しゆくバ耶輸陀羅女い有繋
ふも。敷ふ散敷檻紅葉。秋れ〳〵あくも露とざふ消まゝものを
とさ〳〵俯向つ。鶯ふ太子の示しゆひし。周信の由を澄りゆひ。

動稟せども今更ふ。太子在しまさぬきバ。澄もあ〳〵て干ゆく
ぬ。身の濕衣を爭何ハせん。心苦しき畫しゆつと。哀ち涙即
ゆひりまバ。橋曇弥夫人い奇異の事ふ。思ひ雖つ〳〵羊ハ結ど。
羊い疑ひゆふぞ。他より緯の漏ん先ふ。敏遠由を美まぐし
と。爲將軍の妻をもて。密ふ養させゆひりまバ。淨飯王も不
審ゆひ。太子ハ全く權者ふて。未生以前より種くの瑞應
奇特現しぬまバ。ふる事無し。ふりあゞ〳〵
四年の後ふ。妊娠しを疑ハざ〳〵んや。亦疾病ふも知るべ〳〵じ。
典菜顎ふ腕を胷し。相師ふ觀せて定むべし。と俄ふ宣旨を
下し〳〵ゆくバ。尤妹の醫。聰明の相師們。月景城ふ參内して。各々
灌で耶輸陀羅女の脉を胷ふ。ひしふ。医業觀相毫も違ぐ。
妊娠と寃りまバ。王ハ益疑惑しゆひ。宮中へ出入まる。男子を

耶輸陀羅
やしゅだらじょ

美色ふ
惑ひて
提婆
耶輸陀羅女を
困しむ
提婆
だいば

宜しく礼をべしと爲將軍ハ命じ給ふ爲將軍ハ耶輸陀羅女ハ。たゞ子の示しぬひし事を。毫も疑ふ心無りまじ。有ざるも欲得と思ふ。ども違勅をべくも有ざるべ。憍曇弥夫人ハ宣旨を告て宮中數萬の女官們を咸喚集めて礼せども各ゞ競の〳〵稟をあぞ。亜實寔ハ紛然たり。今ハ早這緯の世ハ隱も無うしろ。聞者孰か疑ハざるべ。皆耶輸陀羅女を彈指して淫婦よと謗りけり。單表提婆達多ハ。怨角の時より

して。たゞ子の多能を精むゞ故ハ自己胷も安〳〵ぞ。青年ハ逮びて。亦耶輸陀羅女の艶色ハ。迷ひ狂ふ意る心猿。縁しを結ぶ綱も欲得と。陳を覗ふ非義の痴漢。爲ハたゞ子宮中を潜出ぬひしよりハ。事成べしと悄々地ハ怡び大王の從子あるをもて。月累城の内宮つも。憚らぎ入りをべ他視を偸

て耶輸陀羅女ハ。遍ること屠ふまども。貞心堅固の耶輸陀羅女。那ゝ不義ハ奔るべ。皆。諸く罵り辱しむをバ。提婆ハ怒を含むりの間。怨憲ハ功を成雖しと。猶尚陳を窺ハ設ハ。正明ぬ種を孕うしと。聞ハ燒き身の火の。厚ク妃情ハ殖ぞや

と。思ひし事の影響しハ。亂ゝ娘しむ密夫の在ける故ゝ憎むべしと思ハ底意ハ明さねども。意の遺恨を根ふめちて。不義の淫祠を正しくも。見つる如くハ積行せば。世の人毎ハ計狡の事を忽地棒ハして。置々しく風説をるふぞ。彰てハ他国の聞元とも。爭何あゝんと称祥の一族。群臣們と相後をるふ。たゞ子の示し措き由ハ。耶輸陀羅女も身の罪を宵んの詭あるべし。異常或ハ猩外の瑾ふぞ。言ハ何とも言ハ

ひをども。たゞ子出家しぬよりの今ハ到て。妊娠

理りあるべきやいなを浩る不正を糺しもせで。黒きを白記と言紛さば。政道是より廢まん。稱種の一門を汚辱し。耶輸陀羅女が不義をしも。刑つぎいかゞあるべゝ。もと商議既ふ一決して。衆官斉一の理非を。淨飯王ふ奏聞しぬまへ。王も疑惑いなぬべゝども。摘罪の輕重を定め難て在せゝば。稱種の一族滿朝の群臣咸提婆の與ふ。説惑ハさまきて在けまば。頻りふ輩の理非を紆て。政道ふ私あゝば。王法裏へいひあんと。左右の梵志ふ至るまで。咸耶輸陀羅女を刑ひぬくと。屠奏聞しぬるふぞ。實衆ハ金をとゝりを。讐ふ洩を賢明慈悲の。淨飯王も既ふして。脣慮を決めぬひいまへ。如何ある刑ふ行ふべしと。諸臣們ふ勅問しぬふ。群臣們相計りて。密夫の罪輕うゝねば。火死しぬくと奏しけり。大王是ふ隨ひぬひ。其旨詔命ありけるを。爲將軍閔ふ。敬き哀むと大ゝ。橋曇弥夫人と相計りて。頻ふ助命を乞奉まども。敢て勅許無ふ。うゝしうば。爲將軍ハ命を惜まぬ。借使密夫在しまもとも。正し犯法もいつぞ。殊ふ左子の淨愛妃ふ。在しまいひを。火刑ふ行たせぬひしハ。陰りふ殘酷いたぞやと。洞を尽して諫奏しぬまど。王ちん首を揮ぬひつ。王事監しとあゝ。公道ふ親疎あゝんや。朕私言を那容べき。疾退ふと烈しくも。宣ふ御容常ふゝ。猶諫め奉らば。逆鱗も沛座らんと。左右の梵志們心得て。爲將軍を理ふくも。王座遠く推遣ぬ當時耶輸陀羅女の父ありゝる。大臣摩訶那摩羅ゝ。猶一族ハ朝ふ在ども。已身の上のゝ阻ゝて。耶輸陀羅女の不辜ようを。稟解りの垂うりり。憲端正の賢女ありしも。濃の茲ふ速びしん。

天命ある哉嘆くべし

廿二 神義婦火坑ふ隨て瑞を現ぜ羅睺羅誕生

耶輸陀羅女ハ今更ふ。太子の示しぬひろ。因位の由も却ふ。造りし罪を塗匿を。調歌言よと謗らまて。衆疑も。解き既ふ畢。正義の罪科ふ陷りて刑罰をべく究まてん。橋曇弥夫人為將軍の力ふ及ぢぬ嚴令ふ。有司ハ内宮より。頻しくも耶輸陀羅女を法場へ引居をべ。隨て刑法ふ備しあるべく地中を九尺九右穿ちし中へ。束ねし紫ふ油と深きて。嶽把とも垂く坑の中の羊嵩む程投入さるへ。火を放てバ忽地ふ。熊々炎々と燃上る。猛火の中へ耶輸陀羅女を。寒落さんとをゐける。他ふ視るさへ戰慄。焦熱地獄ふ異ならぬ。形勢ちると耶輸陀羅女貞烈傳掛ふきへバ。ちろびをねども。貫ある身の濡衣を干めぬ。恨のこゝろ如ふ。

残酷の刑ふ遇ふ。最も敢果ある運命を。思へバ知ぬ前世ふ罪造けん業因の果あるべしと察ても。身孤あるへバ嘆ふ。正しくも胎内ふ宿しを。ちろの御遺ふと。問へ問へ遂えもる親子の縁し浅まれ。死をあん遂る悪報の。深き此身を恨ふやせん。哀しれ哉と言歯敢ふ。若走り行滝つ瀑の碎けて来ハ身ふ貫し。汚名を雪ぐ時ありぬと思ひつ。赤思ふ。妻ハ備露だうも。現世で犯せる罪も垂りをバ天の資も垂うゝもやハと。憑むふ甲斐あゝ今ハ蛍猛火の邊ふ引をゆひつ既ふ伴の火の中へ突薩さるん と云へるふぞ。耶輸陀羅女聲厲まして。妻ふ不義の覚あし。若邪行ありとあゝバ。胎内の子も燒るべし。若誠を志護ゆへ。神助もあゝバ猛火ふも。身を傷らしゆへ。大誓願を唱へ。ゆへ。其言葉も終らぬ程ふ。悔むべし。罪深天をも震へ。炎の中へ。忽地撞と突薩され。

焚と茂る火の燈。火燄つ油紫火の焼掇と。烟ふ巻まて立ち昇る。勢ひ凌競うりけまバ。可惜美玉も一塊の。常灰ふのミ遺るべ
しゞ人咸性の善あるまゝ。刑吏ハ共さく有繁ふ。鼻をつまゝを得
しもわらぬ方僅まで濃んふ燒立し。猛火忽地滅ると斉一流の
底うり突然と。霊水湧出るふ隨ひて。緑の荷葉叢蔚く水面ふ
生出て。最凌競き猛火の坑も。滝々うる蓮池と変じけり。霹の
不測ハ是のゝ有ゝで。荷葉の間より。香氣馥郁と開出し。大
輪の蓮華の上ふ。耶輸陀羅如い坐も。衣の端さく集もせを。端
然と坐しゝ。浩る斉特ふ頻然うる。刑吏ハ咸眤を消て。是ハ
そも甚麼とたうふ呆まて。一要時慢然と停立もわり。揖と坐
して。尻めち密も多うりゝ。怒長視て居ゝとうと。貽て斉事
の為体を王宮へ奏しゝまバ。淨飯王百官皆驚き訝て。

情々地ふ王も法憐へ。潜幸せて斎を。實ふ奏聞ふ違ふと
無き。斉陽の所勢ふ驚るきぬひ。恐てハ悪多ゞ示しつゝ異常の
由も詭ゝで。端天の擁護あるもの歟。思議をべうゝぬ事なれ。
權且刑を止りて。悪多の帰るを俟こて可けまを。遮莫陽應
斉特を憑ゝて。率の疑ちれを遠俗ふ。公然とハ措難し。
月景城中へ禁絢て。焉將軍ふ預くべ。悪多還ゝべ真偽
邪正。立地ふ冰釋せん。余るのゝくと既ふして。齊慮を決めぬひ
しうバ。焉將軍を徴ぬひて。詔命ぬふを。焉將軍の胎び嬰ん
うとゝ。躰て耶輸陀羅女を蓮華座より。やをゝ下しまつして。
王命ふ隨ひ。月景城へ。幽晴き後殿へ。伴ひ入まつゝ。寔ふ
不測の天資ぬ。所命の恙ぬきを。夫婦斉一祝をさく。脆きハ袖
の露時雨ぶり行年の端垂くも。常ふ異る妊娠を。遮むとまを

提婆
譏を
流言して
耶輸陀
羅女を
火中ふ
墮を

耶輸陀羅
やしゅだら

諸天の
擁護
明ふ
婦德
を
顯を

耶輸陀羅
やしゅだら

覆覺て。浩る憂国も宿因ゝ。行と解由嫡竹の。世をも人をも恨
まゞと。察めてぞ耶輸陀羅女ハ。只懐氣く慕たゝ。たゝ子の
ゐん胎ありけりと。堪留わくぬ思ひ川。涙の御衣ゝ盈も理と慰め
給て。爲將軍。夫婦も共ゝ流伏しゲ。主従心を励まし。勅命あり
ける大王の。宣旨ハ得辭き。仁慈ゝり。身を全うして後疑ひを解
ゐん時の有まゝと。思ひくして後厳ゝ。耶輸陀羅女ハ只一個勢籠
せゆゝゝ。傅きとてハ糸更ゝ。爲將軍の妻一個の。宅ゝ車同ゝ
者もゝ。寂寞として心憂。月日を送せゆゝ。程ゝ既ゝ一年半も
過て。竟ゝ平産しゆひしハ。玉の像き男子ゝ在しゆ。羅睺羅尊者を
稟ぜしハ。遠若宮の御事ゝり。たゝ子世ゝ在しまきば。滿朝の百司百官
諸国の小王も慶賀ゝ来ゞたを。嚮の奇瑞ハ知るゝゝ。疑ひハ来
解ゆゝねば。主ぞゝ知ゝね搭種よと。世の人毎ゝ郷傍のゝ。爲將軍

夫婦の宅ゝ。祝もる者ハ垂ゝりけり。浩る時を風聞ゆゝ。耶輸陀
羅女の心苦しさ。嘆ん方もあるけまたゝ。身のゐる果と哀ちつも。
心ひとゝゝ若宮を。たゝ子のゐん遺骸と愛傅き。憂ゞ中ゝも育て
つゝ。遠和子成長ゆゝ。うち連立て育ゝ閑く。檀特山へ分登ゝ。
如何ある鑿き巖をも。尋ゝたゝ子ゝ一回ハ見糸奉らゝゝゐんと。
敢果ゐたゝ憑ゝを心中ゝ。憂ゝ年月を送りゆゝ。ゐん心として可念也。
一書ゝたゝ子出家の後三年過て羅睺羅生とも或ゝ佛ゝ行經ゝ依て六年
後とも或ゝ云ゝ是を姫六歳ゝ是を胎ゝ如来出家六年已後姫出胎ゝ如来選其父家之日羅睺羅年
ゐて誕とも云

廿四

たゝ子捨身の誓汗を苦修しゆゝ并禪宗坐禪の始

有方便ゝ慈悲たゝ子ハ。所遺物の数品を。權人車選ゝ抵しゆひて
深居天の化身ある。獵師より授とゆひし。法の衣ゝゐん身を纏ひ。
慈弓の杖を佛力ゝ。番けき言葉を向上ゆひつ。識そうる岩根淵

分々々拳豆のふぞ。別きを腑こ奉やさて。嘆停まつ〳〵と車
屋の響育。嘶ふ犍陟ゞ轟の音の。轟轟し響く谺さへ。澎ふ
濁けく底ゆくをも。沛念ふ懸ぬさゞ。一心不乱ふ巔を望こ。
一因絶頂を踏定めて。備神仙の柄をこそ。尋めく思しつ。人逝
絶て怪ゞふ。蔓猶氷る泮晴の。雪溜ゆふ沛足も。凍て扱もし
ゆふ狼ふ。寒風瘴氣肌膚を犯して。心地死ぬべう思し去を。
沛心を励ましゆひつ。葛ふ攀り嶽を傳ひて。千辛万苦ふ疲
労ゆひし。沛身も厭たゞ樹の下圃の。苔滑ふ辷る。路
慧煙を飛蹴つ。幸くも巔ふ登りゆくば。丼時歳回の幸をう
經ふけん。樹木精霊こ繁茂して。絶氣の輿ふ動きゆこば。駭暈
ゆひしを。彼悠蒼の靈殿ふや。命ふ恙存しまさで。翠所を經
歴しゆひつ。當山中の勝景ある。跡探宝ふ找くゆつば。青
壁峨々こる白雲の裡。樹林森々こる青苔の上ふ。童顔鶴骨の
老翁ゆり。木の葉衣を身ふ纏ひ。端坐結印して眼を閉寂莫こる
為体ハ是や賢道垂迹を修こる。神仙ゆくんと思しゆひて。ゆみハ
仏の老翁が眼を用くを後ゆひつ。爰心修行微さまく欲き固を
海ゆひしゆば。神仙大ひふ貴纏して。俺ハ是阿蓋々紀ぞ。垂
上菩提の有を究め。一切衆生の苦を救ちんふハ。下根凡夫の
体し易ゆ。捨身の行を修をべ紀ゆりと。師弟の約を結び
りきべゆこ子ハ深く慎びゆひつ。躰て所髪を剃落し。願くハ
一切と共ふ。此煩悩を断べし。誓をそ立ゆふ。沛志の堅固こる
を。神仙深く感歎して。瞿曇沙弥と唱微しつ。教戒最も
厳ゆきべゆこ子ハ二千五百戒を。慎んで持こゆひ。垂上道を修
しゆふ。雖行苦行ふ剃ゆひし。沛髪の迹の月代ハ速くも暢て

慈栗欲。薊の花に異あらぬも。夏い炎暑に編こしを。久く永霊に依しが如き。昨日に変る俗客の。浅猿しくも將弓き哉。什麼煩悩を彩んあに。左子落師去ぬひしより。此法佛道を学ふ者。咸刹製して僧と成い。西域の風俗にて。皇国の沙時に入垂うりを。佛法二国に傳来してより。崇峻帝の沙字に。司馬達等の子。多須奈といふ者。剃製して。名を徳斉法師と唱へり。是 本邦人の出家して僧と成りぬる始なり。同新休題。慈多左子の瞿曇沙弥に。阿羅々仙に隨ひぬひて。同ら薪水の労を厭ふ事の實を食し。石蹲を喫して。千辛万苦に雖行を。懈怠なく修しぬひ。既に慈界の垢を去て。身神清浄に成ぬひしうへ。躯て阿羅々仙に真身より上道の神仙伽羅々仙に。左子の教を襲るに。左子亦伽羅々仙の教導に隨ひぬひ。邪魔。秘密。清浄窟の。三窟珠伽を修しぬ。勤行寛に勇猛なるべ。真本師さく都に。及ばざると感歎して。伽羅羅仙に。特陀羅摩師耶仙に。左子の教導を拒しけり。左子に。亦更に。特陀羅摩師耶仙の教に。猶ひ。不変。實相隨縁の。三真如を行ひぬひつ。一百日夜に坐せし。終。起ことを許さるを。一百日夜に。一百日夜に。即し。終。睡眠ことを許さるを。行中垂心垂云ふる。雑行を修しぬに。水を飲さく禁じらるを。僅に木の實を日に一度食しぬのみなるに。白玉の如き沙門。鳥も日に黒き風に。荒ぬへば。肉尽骨露て。枯木の似く。に。痩ぬへども。自精神を励ましぬひつ。二伏の炎暑を忍び。厳冬の寒苦を凌って。精行怠りぬひぬこと。登山しぬひしより既に。経て。数に。お年

を經なふまで。非々想定を習ひなゝバ。今い真法味の真意を。得ざるゝを得ぬひーゞ。是永寂の休處なゝ。そと。慶喝ーぬひーゝバ三師ふ別て。獨參頭山ふ進こぬひ。妙法靈泉の邊ある。金剛石上を掃とーて。日ふ胡麻一粒を食ーぬひつ。朝ふハ出て嶮渡ゝる。危き嶺を經歷ーぬひ。夕ふハ赤金剛石上ふ。坐りて。菩提決坐ーぬひ。無心意。無受行を修ーぬふ。雪降積る寒風の。烈ーれふも畏きぬを。石上の誠ふ終夜睡眠を。忘だ坐禪ーて。諸天ふ敵命ーぬひけゝ。是や達磨ゞ學びぬゝ。面壁の行ふーて。禪宗ふ用ゆる所なり。夜て。太子ふハ晝夜をゝゝ。ふ。情身命の艱難辛苦。勤行。憂も惰怠なて。用位果位。二昧の。二業九品を修ーぬふ。最初の役ハ毒蛇惡獸害を做さんを形勢なりーも。彼慈弓悲業の威德ふ恐きて。近づくゝを得ざりーゞ。畜生殘害の情ふも。後ふハ真德ふ飯依ーて。敬て妨せざりけゝ。茲ふ三十三天の中。第六天ふ魔王ありゝ。邁ふ太子ゞ勤行の。尚体を見て大ひふ驚き。彼正覺を得て妙法を弘め。一切衆生を利益ゆさべ。已魔道滅をべし。と思ゝび其身を美女ふ變ーて。下界へ降て。坐禪ーぬふ。太子の傷へ找を寄。情を會を媚を振りて。太子を惑ー奉ゞ。淫慾をめて戒行を。妨げんと為つゝども。當時太子ハ既ふーて。多年苦行の功德ふよりて。神通を得ぬひーゞ。天魔の障碍なりと知ぬひ。外面如菩薩內心如夜叉と。喝ぬひつ彼悪業をめて。佛心強くも魔王の美女ゞ首を撲地と撃ぬゝ。花顏粉姿の美婦も。忽地本形を顯ーて身の長三丈除なる。惡鬼の猛相畏ーく。火焔を吐つ。太子を白眼へ

悉多太子
ちんたい

悪魔
太子の
勤行を
妨ぐ

魔王変化
ばちらの合ゑ

今い化身して歎くとも力ふ及たゝとも思けん第六天をうち向
上て大喝一声呼と斉一。奇怪異形の悪相あり。魔種の眷
族数百萬。ゆふ〳〵敵戟を振回めゝて一瞬間ふ光陰
ア。たゝふを中ふ含綢て。迅雷の逆きるる如く。縣波を低り
つ正法を。妨げんと図けば。震動天地を裏も。其姿しを
を端然と。たゝふい毫も動顔なを。諸悪莫作。修善奉
行と。微妙の声ふ唱ゝ。ゆゝば。不測や尊解より金色の。
光を放ちゆふ。数萬の悪魔外道ゆ。服を射らるを
て伏勢び。器械投りて用を為さず。箭を設てば途より。
光回りて其身を射。火焔と降せば蓮華と化り。毒風を吹
せば香風と変じ。更ふたゝを害もるゝ。能はざるふ驚るき
周章て。衆魔第六天へ逃回りゝ。此より度々方便を更
て。たゝの修行を妨ぐもぞ。悪光ふ敵し得ざるば。魔王ハ
慚愧後悔して。竟ふ降参しけゝ。浩る悪魔外たゝ。
正法道ふ降しゆひし。たゝの威神力ハ既ふして。茲ふ十二年
の雖行を。修しゆひける。切徳あり

廿五

二句の偈を得て。たゝ成道 幷 婆羅門の名義

たゝ少家にして檀特多頭の両霊山ふ雖行を修しゆふ
と。既ふ十二年を過る。毒蛇悪獣の類ハさゝるる。天魔
の障得もゝ正法ふ降しゆふ。徳光ゆまども。年来日ふ胡麻
一粒を。食しゆふのみあるまべ。身神皆く疲労ゆひて。未ざ
真道を得ぬたゝふ。今此修もる苦行の如ハ。正解脱を得る
ふゆゝ。ぞ。因食を受て後。成道をべしと思して。霊ふ沐て
涸こと垂き。尼連河ふ迫りゆひ。尊身ふ水を濯きゆふ。折

しも水をもて造りふる。率婆婆流を表しとたゝへハ
水を掬分ぬひつ。ゆちく引揚見ぬくべ。諸行無常是生
滅法生滅々已。寂滅爲樂と。二句の偈を淡墨もて記し
うるを觀のふとり。是や正しく紀垂の滅道の。要文なりと觀喜
ぬひつ。廓然として大悟しぬ。余をバ率婆婆の要文ふたゝ子
正覺を得ぬひしも。其こゝ道を資ぬ。淨居天の所所あるをバ
や響ふ授りぬひぬる。慈弓悲箭も今ハたゝや要垂紀物と思し
志うべ。傷の丘ふ埋ぬひ。开ゲ上ふ伴の率婆婆を。立置せ
ぬひしゝ。後ふ黄金の高額と変じて。千載不朽の靈地と
なり天竺岡と喚ぶ。今猶舊跡あるしとそ。人這頌と
綴じて曰。始終たゝ子の学道ふ斯まで淨居天の助あらバ阿羅
伽羅菊陀羅三仙の導師ふも及ぶべうもなく寒暑を度ぎ食と

断。発きふ在ぬたゞとも。原来權者の尊嚴ふ在せバ。自然ふ
して正覺を得ぬたゞる支垂うもやいと論ぜるハ甚しく。
積すき俗心あり。浩る小量もて奇く妙々ある。不可説不可
思議の法の道を。率で窺ひ知るべうもん。十二年の経行も。
威淨居天の神慮ふて。彼二仙も恐らくハ淨居天の化身ある
べし。古人の言の葉ふ。若中の苦を喫せさるバ。人ハ中の人ふハ
成難く。二さび骨を折て後。良医と為と云まいり。余をバ
率婆婆ふ偶を託して。たゝ子ふ示さまし神慮ハ垂常迅
速を示しぬふ。隠意ふこそ有んぞうめ。抑率婆婆ハ死骸
を葬しうふ遂墳ありけるバ。昔日人間一大事の死相と
示しぬひぬる。生者必滅の理の後を示しぬひしぬの欲
余をバ率婆婆ハ　本邦ふ墳とりふ梵語あるとぞ。今ハ俗人

推あげて。本をのべて。俗ふ其形を。造りて。供養ふ立るとの。
車懸婆と称ハ。濫てり。若別ちて号ハ。ハ。本の車懸婆。
石の車懸婆といふべ。ん。今俗ふいふ車懸婆の形ハ。
五輪の富懸を表せるなり。是を梵語ふ蘇倫婆といふ。車
懸婆ハ直立の墳をいふ。亦金剛經畧疏ふ懸着梵語
卒都婆此云高顕云云。高顕ハ　車郭の。今俗ふいふ車
懸婆なり。車是塞教語の。大日二昧耶の形ふして。九輪
了元九の五字を書し。其長定法。三尺七寸ふ低るハ。三十
七尊の表示ハ。

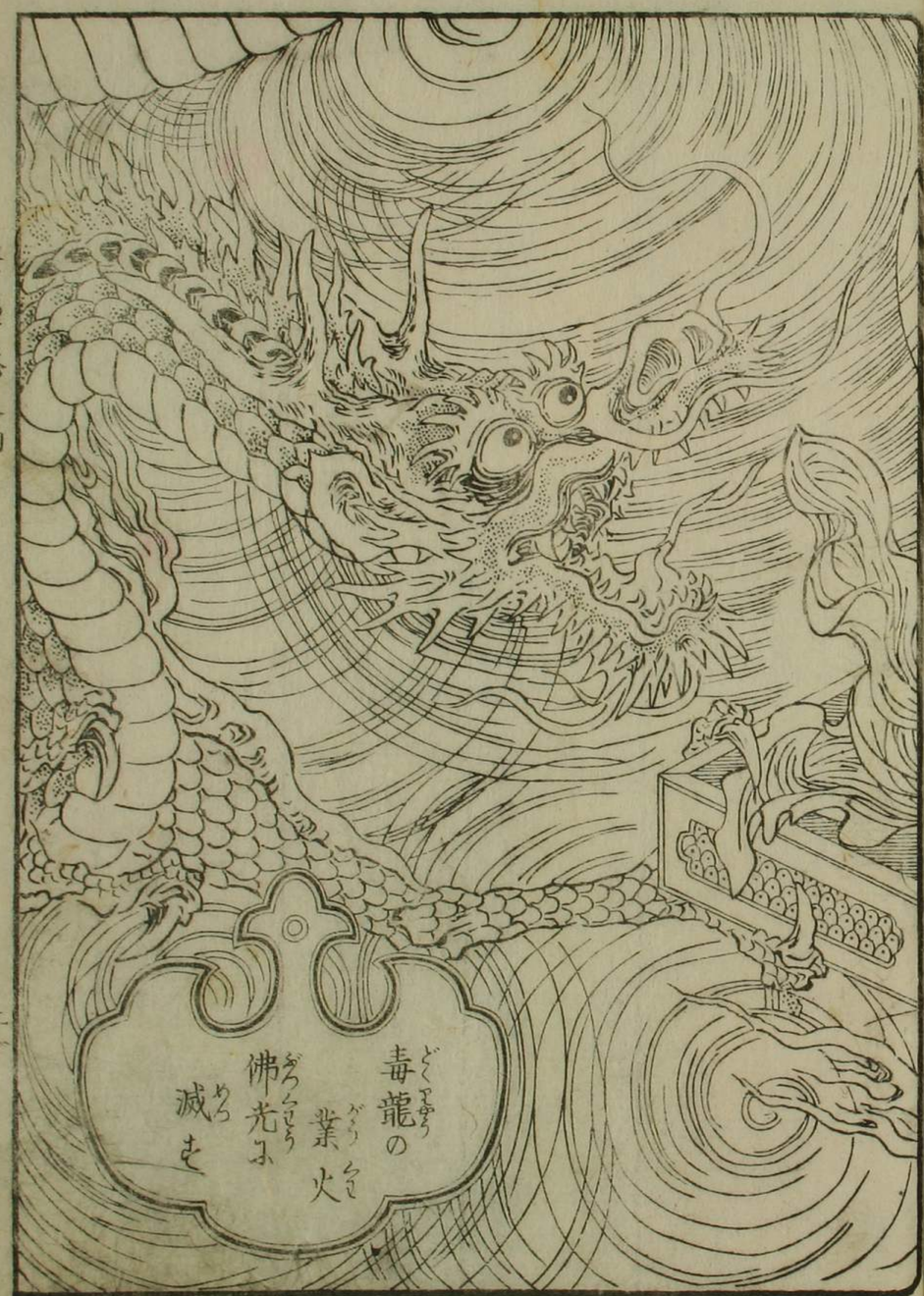
廿六　世尊毒龍を降して正法を弘む并竹林精舎を営

卿放悪多太子の瞿曇沙弥ハ既ふ正覚成道しぬひ。帝釈より
金光を放ちて。三千世界を照しぬひ。三世過去現世未来を観察しぬ。
ふぞ。先や神力方便めて。我子ふ号し。紀三界衆生の。煩悩を
救ん。と大慈悲心を發しぬひ。ちん齢二十歳なる。十二月八日
の暁天ふ。初て下ふ。ぬひ。世ふ出山の釈迦と称て。寫し
奉る尊像ハ。當時の御姿なり。余る程ふ浄居天ハ。躰て
太子の過りなふ。洛の役を畫しぬ。神通をめて。摩竭
陀国なる。善生村の星人。飯いのと。ハ。ハ。言なる。淳陀
王の太子。發心修行の為ふ。十二年の艱難を經て既ふ正覚
成道しぬひ。衆生引導直指滅佛道の。本願を充させぬ。
一切衆生を濟度せんと。今這星へも来隙とぞ是や二界
六道の。大恩教主ふ在しませば。世尊南無釈迦牟尼如来と
尊号し奉り。淳好清き食を供養して。無量の幸福を得ん
りのと。置々し。紀まで星人ぐ心を合して清浄ふ乳糜を

煎てぞ俟居たる。乳糜とハ牛の乳をもて煉る糜のことなり製法ハ數
一千疋の牛の乳を搾りて五百の牛にのませ又五百の
牛の乳を二百五十の牛に飲せ又二百五十の牛の乳を百
二十五の牛にのませ又百二十五の牛の乳を六十の牛にのませ又六十の牛の乳を三十の牛にのませ又三十
の牛の乳を十五の牛にのませ偖十五の牛の乳にて志らぎの米と
糜に煮たる也丹誠をこらして煮るべしくはしく佛本行經に見へたり
程なく世尊來なひしを。聖人們見奉るに苦行に痩衰なひしかども光明赫き威相莊嚴。寔に尊く在しますにぞ。大家恭敬礼拜しつゝ。彼乳糜を金鉢に盛。金鉢ハ鉄鉢のことく金をもて造りたるなり 金鉢といふハ佛本行經に金鉢を献ぐと あるバ以下こゝによる 跪て獻まつりきバ。世尊悦び受なひつ。衆人に對ひなひ。三寶供養施主於當來安樂先病多福長壽於來世生人天受諸快楽と。呪願を唱へなひて。乳糜を喫しなひしかバ。衆人隨喜の涙を流して。愈信し奉るにぞ。鹿野苑に入なひて。四諦の法を説なふに。是に因て道果を得る者億萬人に及びたり

周にいふ。四諦の法とハ。苦諦。集諦。滅諦。道諦の四をいふなり。苦諦集諦ハ世間因果を説。苦ハ果。集ハ因なり。滅諦。道諦ハ出世間の因果を説。滅ハ果。道ハ因なり

剃て世尊ハ鹿野苑にて。衆人を化度しなひしかバ。軈て這地を立出なひ。婆羅閦城へ趣きなふ。半途にして日の暮けり。當時兄弟三個の道士あり。兄を優楼頻迦葉といひ。次を伽耶迦葉といひ。末を那提迦葉といふ。世の人三迦葉と喚傚しけり。大迦葉とハ別なり混ずべからず一書に優楼頻迦葉を大迦葉とあるものハ誤りなり 兄弟ともに仙術に長て。神通廣大なりけれバ。国人深く崇敬せり。浩れバ兄の優楼頻迦葉ハ。神通自在を自恕して。我こそ天下無双なるらめと我慢自負して在役に。這邊にて行暮なひし。世尊ハ軈て優楼頻が許に一宿をぞ乞なふ。迦葉諾ひ迎へ入て。對面しつゝ熟觀るに。三十



釋尊

二相具足さまをば。是凡人ふん有べうゝ況と。心中大ひに驚き
思ひ。何国の人そと名を問たまて。世尊ハ遥ーのふ一と垂く。
明白ふ名告ぬひつ。慶心菩提の道を求めふ。十二年の苦行
を経て。無上真正の道を得たまば。大千世界の一切衆生を。
化度ぬさまゝ欲もる由。寶ふを聞よりも。優婆頻迦葉心の
中ふ。原来誕生の時瑞の。瑞應現ー学ぶぞーして。諸藝ふ
達せりと世ふ聞えし。慈多子ありけるろ。慈氏ども世榮
を捨て菩提を学ぶハ。其道迂幸くして。我が真の道ふハ如ぞ
遊莫楽が行力を。試やと思ひーうば。世尊を敬きて這年
来。己が法力ふも退治難き。毒龍の栖ある。石室の在けるを。
世尊の即住ふ与へけるを。世尊ハ敏より神通もて毒龍の
栖ある。知覚のよて在せども。世尊恐怖のことゝ。件の石室

ふ入ぬひて。結跏趺坐ーして在せる程ふ。忽地毒龍頻を出て。
只一にふ釋尊を。呑食せんを欲ひ。世尊の威徳ふや
恐きけん。近づくことを得ざりーうば。頻ふ火焔毒氣を吹ども。
世尊毫も動じぬたば。毒龍益怒逆ーつ。首を逆立身を搏て。
猛火石室を焼毀つふ。世尊が真正の金剛躰ふハ。些一の煙も
罹らぬ。端然と安坐ーぬひ。毒龍ふ對ひおん聲言く。一喝ー
ぬゝば忽地ふ。世尊除の大毒龍。寸の小泥と成て蠢くを。世
尊今神ゝ入ぬひ。二飯依を 佛法僧ふ飯依もるを 授ぬふ。落ーー授ふ石室ハ。
変成炎炉とぞりけるを。優婆頻迦葉遥ふ見つ。掌を拍て大ひふ
笑ひ。驚むべし瞿曇沙弥。十二年の苦行も。漆ふ成らで虚と
ある。寂滅の楽ハ本懐なゝん。笑止々々と嘲りつゝ。徒弟を連
て尾隨と成し。石室の跡を来て見ればば。巣立さる鷲石ハ。皆赤蛭

粉ふ火燵て。纍々たる瓦礫塲。焼ひの除烟未だ立沖て。煩熱四方を焼けきば。寄も近づき難うる中ふ。豈測らんや教ふハ。自若として在します。尊躰ふ纏ひぬひぬる。ふの葉衣も聊焦ぬ。繹の奇特ふ感ぜうる。迦葉師弟を商して。世尊ハ完ふを含笑ぬひ。毒龍身の業火を起して。石室ハ焼と雖も。那我正身を焼得べき。彼一喝ふ降伏しうきば。既ふ悪業を解脱して。今ハ遠離沖ふ在と指示しぬひぬる。迦葉師弟覗き見て。荐驚き恫きつ。思ふに世尊を仰見きば。白毫の金光赫々たる。羞明ふ我知らず。大家地上ふ平伏て。恭敬礼拝をぐらり。當下優楯頻ハ称ずの。神通ふ感伏して。慢心を惻隠しつ。頑くハ大知識。我輩を教導ぬへと。實心ふ帰依しけきば。世尊その信心を賞賛しぬひ。髪を剃せて弟子と去ぬふ。這義を聞傳へて伽耶迦葉。那提迦葉も。佛弟とあり居きば。其徒弟も数百人。咸佛門ふ入しより。各法眼淨を得阿羅漢果を得うけて

因ふいふ。弟子とハ其師を。父のごとく尊ミ。兄のごとく敬ひて。其身ハ弟のごとく。子のごとくふ隨従しつ。教を授る故ふ。弟子といふ。亦学ぶ道ハ其師より。せざる故ふ弟子と称ず。法をバ一字の師ようとも。疎ふ思ふべうず。師恩の深きこと。親のごとく兄のごとし

當国の摩竭陀国主頻婆沙王。頻婆沙羅王とも。婆羅門城ふ在しまして。三迦葉が称尊の。徒弟と成しと聞ぬひ。原来淨飯王子の法德波神通廣大なる。三迦葉の上ふ。真説法を聽やとて。世尊を城中へ請ずまいらし。説法を聽聞して。因果の道理を

和りぬひしより。因人の罪を宥し。大ひふ張給施しの法を行ハ
まし〻ば。国人愈如来を尊ミ。流法聽聞ふ諸来る者。大ひふ
釋集しぬるふを。紙沙王諸侯ふ命して。廣き竹林を拓き
らひ。一宇の精舍を營ミて世尊ふ就ぎ申ひ乃きバ。世尊深く
感納まし〻。數百人の徒弟と共ふ。遠地ふ移り住ぬひ。竹林精
舍と号ぬひて。偏世人を化度しぬ。當時舍利弗と異做き者
あり。其母眼最清く。賜の眼ふ似ざるバとて。幼稚より舍利と号
く。舍利とハ賜の事ふして。天竺の諸人。舍利女妊娠しより才
智弁論。順日ふ百倍ましまし。一相師是を觀て。是ハ男子の
智德ふ倍る。故あるべしと言まし〻。果して男子を産しうバ。
母の名を其侭取て。舍利弗と号ふけり。弗とハ子といふ義ふ
て。日本語ふ称る時ハ。取も轉さまを舍利の弗あり。梵語ふ舍利
弗と云。幼稚より才智弁舌。衆ふ超て凡庸ならず。博く諸論
ふ通暁して。外道の法を学びしを。神通亦廣大ありしが。世尊
の教誡を聞傳へて。是や無上真正の。妙法と知覚しうバ。
同学の友目連とも。相誘ふて共ふ倶ふ。外道を棄て二百人の。
徒弟を連て竹林精舍ふ。清来て佛門ふ入しより。後十大
弟子の隨一ふ。智慧第一と称せらるまぬ。高名の道師影の
ごとく。威法第一と誠けまバ。佛道廓々ふ推弘まりて。遠近の
老若男女。竹林精舍ふ群參する者。日毎夜毎ふ繁しく。
是ど沿ふ絶も。消滅らさるるとぞあり。茲ふ婆羅門摩訶迦
葉ハ。是大迦葉あり。摩訶梵語ふしてもるのち是大と
修行して在世ふ空中より清居天ハ。妙なる音聲を發し
ぬひ。釋尊既ふ世ふ出ぬひぬ。速く往て師と仰ぐべしと告

ゆふを聞くよりも。摩訶迦葉大ひふ歓喜。翠天を拝して下山し。竹林精舎ふ找こへて。世尊を恭敬礼拝しけり。二世観通しゆふある。世尊ハ疾くより大迦葉が。法門ふ飽きべ死を。紹しぢて在せしうば。善哉〳〵真の比丘。迦く找こねと宣ひつ。玉座を分ちて摩訶迦葉を。帝側ふ坐させゆくば。自除の徒弟們預ぢて。新参を郭まで。ふ。崇ゆふ帝意ハ。奈何ぞやと問奉るふ。世尊示しゆふ。吾法の道を六萬歳ふ遺ださん者ハ摩訶迦葉が。功徳廣大の力あり。と宣ひを然もひふと。稟まゆ間覚東なしと。思ふ徒弟も多くりしが。其ゆん間の違ぬを。後ふぞ思ひ合しけるら

廿七

念孫濫觴貫玉の数法并百萬遍の功徳

世尊ハ竹林ふ在しまして。倩思しゆふ。初四相生老病死を厭ひ。

幾心して。愈くも父大王。姨母夫人を捨まつり志も。今ハ修行流道しつるば。且父母の国ふ還りて。父大王姨母夫人ふ。見参ぢい有べう〳〵ぢして。数多の徒弟を引連ゆひつ。竹林精舎を立出ゆひて。迦毘羅衛国へ趣きゆふ。道をぐるも説法しゆひ。国人貴賤の差別なく。大ひふ感化しゆふ程ふ。婆羅婆婆国の波流樂王ハ。別て仏法を信じゆひ。長く世尊を自国へ抑留ま欲しく思ひゆへど。一且ハ父母の国へ還幸しゆふと余きるうつハ理なく。抑留ふ力なくも。猶別を奉るを。酷く悲ひ法。法華深廣の端をも。知〳〵で。如来ふ別を奉らば。既ろ仏果を得らるべ死。猶くハ法要を遺しゆくと。乞ゆふ。志の最切なるを。世尊深く感じゆひ。大王若煩悩を。滅せんと欲しゆくば。ふ穂子菩提樹の実一百八顆を。紐ふ貫しゆひて。常帝身ふ随へゆひ。

いぎ
鹿野
瞿陀弥
くさ
憍曇弥
げうたんみ
淨飯王
じやうぼんおう
好容
こうよう
芙蓉
ふよう
耶輸陀羅
やしゆだら

大迦葉
だいかせう
世尊
せそん
目連
もくれん
羅睺羅
らごら
世尊
故国ニ還リテ遺體ヲ知ル

心中ニ南無佛陀。南無達磨。南無僧伽名と称へ奉て。弥陀の
本願を一子完。次ニ過ぬ。日毎ニ真数二十萬遍満
なへば。身心乱を諂曲を除き。壽終をバ物利天ニ必生
なんべく。若百萬遍過ぬれば。當ニ百八の結業を除て常楽
の果を得なんべし。と親切ニ示しぬるバ。波流黎王大ひニ
悦び。遠く城外まで。称尊を。自送り行せ給ひつ。躰て別を
奉ること。本願子一百八を。効ニ貫して一子くくニ過ぬひ
つ。一心ニ。佛果と念じぬひける。是数珠又念珠の濫觴なり。
然るニ古今原始ニハ。後漢の章帝の時西域の僧。始て念珠
を作ると見へたり。思ふ〳〵ハ是彼僧ぞ。始て作ることハ有ぞし。
其時始て中華へ。持渡て来つるなん。日域ニハ百済より。
佛法渡りし時既ニ之わり。其法一百單八の数ハ。一年十二ヶ月

廿四氣（十五日を一氣として二十四氣を一年とし一月の節と中ニ主号あり曆を見て知るべし）七十二候（五日を一候として七十二候を一年とも知るべし）の義を象るなり。然をバ今佛間ニ。童児を集め。一僧を清
じて。百萬遍を行ふりのハ。其功德の頂ひなる事。波流黎王
ニ示しぬひし。世尊の御言葉ニて知るべしの

廿八

若宮佛衣を熟て殊解と称并羅睺羅の因位

却説世尊ハ数百人の。徒弟と共ニ洲々て。迦毘羅衛国の境なる
波夏祇耶といふ街まで。托鉢して来ぬひける。遠由迦毘羅
城へ聞えたるバ。淨飯王ハ其最初太子出家しぬひしより。癸
現世でハ相見ることも。然ハざる歎と。遠年来。臨て彩たりある。
歎きニ沈こぬひしニ。今や学道成就しぬひ。称迦牟尼如来
と尊称せ〳〵ると。国人の仰信大なるなり。古郷へ帰り
来なんと。測らざり知と歓喜の。眉を開くや優曇華の。花侍ち

得つる心地しつ。速に請招きたべしと。烏陀夷に勅使を命じ給ひ。迦の車駕に五百人の宮人を副らきて。波優波耶く遣しゆくべ。烏陀夷は頻に路を急ぎて。速く波地へ近りし程に。世尊は遠地に双垂死。富家ある人ども慈善ある。伽陵長者と喚ばる者に。尊清せ〳〵きゆひしくべ。則ち其家に入ゆひて。説法教化しゆふて。數百人の徒弟ども。咸その道理に寓て在り

因に云へ。西域に長者と号へ。富商大賈財を積こと。鉅萬ある豪族のごとく。中華にては德高ある人を。推尊して長者と称せり。皇国も亦之に倣ひて。都て尊貴の号ある人を迎世は本邦人も。天竺の俗に習ひて長者といへば富る人の事とのみ思へり蓋多くは天竺に

竺にも十德ある人の称なり

烏陀夷は躯て伽陵の許へ勅使の旨を通じけるに。世尊深く歡喜ゆひつ。烏陀夷を迎へ別来の後恙無きを。慇〳〵問ひ給ふ。烏陀夷は敬恭礼拝して。世尊の法顔を見奉るに。美玉の如き貴膚も多年の艱苦に最憔悴。痩黑ゆひしくべ。背の面影在まさでもども。端嚴の法相尋常なるに。數百人の阿羅漢が中に。在しまして貴容殊衆星連珠の大盧に。根盤の明月の異名の如く。自然頭低て。隨喜の涙に袂を沾しつ。聲に乘ゆくと聞えしを世尊聴ゆひて仰せらるゆう。吾身昔日と等しうして。豈車駕に乘ゆ。ぞ。孫に親に妻妾の恩愛の絆に引きて。故国へ返るに。あるべき。下化衆生。隨縁真如の理あるべゆ時。師弟の礼を着き

同侶と流て走りあんと。洗耳が如も示し指つ。汝も遠有心
得よと。弟子に示しぬひつ。諸羅漢と一般姿ふ草鞋を穿
ちて。伽陵長者が。第宅を立出ぬ。ふそ。烏陀夷も已事を
得ぎ。宮人が。前を。譯ハして。伝奉しけまバ。當時法門ふ
飯ぎる者。二千五百の人数あり。其衆僧共侶ふ。師弟斉一
徐行を。諸人早く聞傳て。如来を拝を奉らんと。数百里
の路の間。両辺機の雖る如く。寸地も隙さに押合て。坐し
て。行列を見るもの間。是ぞ世尊ふ在ますと見奉るべく
も有ねば。衆人望をい多くども。皆何とるく尊くて。偶仰
低頭せざるハ無し。日を経て世尊ハ迦毘羅城の。都くふ。せ
ぬひしうバ。王命を奉ぎる。烏將軍ハ数千人の。宮人を
率て。遠く迎へ奉りて。摩耶夫人の靈を頼めし。文陽山

ある青庵殿へ。清ド入奉まバ。世尊ハ衆僧ふうち雑ぎて。
荘厳善美を尽しる。玉殿ふ昇ぬひ。役の法坐ふ着
ぬ。當下淨飯王ハ憍曇弥。好容美蓉の三夫人。鹿野瞿
陀弥の両新宮。昔日ふ子ふ付くぬる。数多の女宮と共侶ふ。
三大后。月御雲客。百司百官今日を曙と。衣冠を飾り条
列して。如来を拝まんと思ひしも。世尊ハ思しる召義ありて。
所茅の別を為しぬまで。皆藤布の墨染衣ふ。木葉の袈
裟を掛しるの。日ふ黒く疲疲る。一様の沙門ふ。何
ぞを開と分疑て。大家惘ま果ふ。茲ふ第二の妃
耶輸陀羅女ハ。おん煩ちしくも。太子の遺骸を。産誕しぬひ
ても。猶荒殿ふ禁ふ囲ら。て。烏將軍夫婦の宅へ。滞坊ふ
者も。配流ふ。等しく親ふの薄命を。嘆きふ。沈む鬱鬱。憂

年月を送りぬひつ。今日あんたの子還幸しぬひ。青蓮殿ふ
へかふと。聞悲びふ就て。ふ。猶悲しさも十寸鏡のもくぬ心を
紛しに見ねば。上ふも。まゞ然ひぬふて。たの子還幸まつをと。
鹿野。瞿陀弥の両女ふハ。疾よりあん泥法をぬひしふ。妾ふ
紛くせぬえぬ。世ふハ猶きに限ぞと。眼帰ちつ泣伏て。綾り
も敢ぬ袖の雨。晴ぬ懐ひを。此時ふ。干さぞハ何時ら湯衣を。
眼果へたと尋思しぬひ。烏将軍の妻をもて。橋曇除夫
人の沸洋へ。妾も如来を拝まに欲しく。嫌き沸免と夢る女。
頻ひ上。待ると。頻ふ歎たくらふぞ。夫人も有繋衰きふ思
ひて。嫁女ふ加入らきしくば。耶輸陀羅女ハ喜しくも。赤面
煩き心地ふゞく。今茲六歳ふ成らせぬひし。若宮を連ぬひ。
昔時たゞ宮中を。潜び出させぬひし。涙へ。遺し猶せぬひふ

けゝる。沸衣を猶々地ふ勢へぬひつ。数千の嫁女ふらち雑まて。青
蓮殿程の末席ふ。頻えて在しぬひしゞ。同躰一様の羅漢のを
如来を見分雖うるふ。人々呆まて眼を見合を。此時ふ。あめりと
耶輸陀羅女ハ。若宮を引寄ぬひ。此年来慕ひぬひし。おん
身ゞ實の父君ハ。那羅漢の中ふ在せり。尋て是を進らせ
ぬくと。波沸衣を遁與しぬくば。若宮ハ怜悧くも。稚児心ふ
黙頂ぬひつ。沸の沸衣を勢へぬひ。衆くの人を掬分て。寒
然と出ぬひしを。此ハ何者の子ぞ。玉座の系るり。疾退けと
迫居ゞ。推止るふも取敢ぬたに。法坐の方へ歩へ。侍第三
の坐の羅漢ゞ前ふ。浮涌踵で。波沸衣を捧ぬくば。羅漢ハ
衣を受ふ食て。完ふと笑を含こつ。不變真如妙覺無爲
衆生智願皆圓満と。聲朗ふ唱へぬつば。忽地阿羅漢の形を

縛して。光明垂得の法相を現し。白毫より（万善の功德ありて眉間のこと中ふ）
白毫金光輝きて。殿中の七寶彫繡ふ映じ給ふ。繹の奇
特ふ方便までも。給ひ惑ひ給ひ。大王も下め夫人新宮。
女官嬪女堂上堂下の。群臣斉一感嘆して。大家恭敬礼
拜しけるに。一千五百の阿羅漢も。坐を遠巡て異に同音
ふ。本有本佛。南無釋迦牟尼如來とぞ唱へける。遠貴形勢ふ
耶輸陀羅女ハ。嬉しさ譬方ふ有ねど。感涙不覺ふ沾うつ。
我知らぬ列を歩て。佛足を拜しぬ。世尊も法座を下ひ。
父王妃母夫人を敬礼しぬひ。垂比の慈恩ふ恃奉て。出家
做し先不孝の罪も。一切衆生を憐く極乐浄土へ引接ふさん。
ふ。ふ。ハ貴恕しぬ。備遠推児ハ異常ふ生まれて衆人驚
惑しつめるど。耶輸陀羅女ハ貞操ふて。織汗有ざる女ふ。

吾出家以前より。既ふして孕ふ。と。両三年費覚ぬ。六年過
て生まれしハ。遠推児若世ふ嵐の巣完と。六日塞で出さるし。
過因を速く果せるなり。余まバ吾子の徴なる。遺物の衣を
見ぬと。一偈を唱へぬひ。ふ思議なる哉仏の法衣ふ。
忽地世五字の妙文織做せるごとく現まて。我去後六年過可
得善男子即是我因位爲正汝生來大善知識と有けるぞ。
王も夫人も感嘆しぬひ。発念初て氷解して。後悔悔悔ふ勝
ぬまぬ。堂上堂下ふ羅列し。群臣女官も今ぞ知る耶輸陀
羅女の貞操と。若宮の聰明を。歎賞してぞ感涙を流さぬ
者なん無りける。続中鳥將軍ハ。我さへ鼻の高やうなる。
心地せられて居ざ。耶輸陀羅女ハ猶更ふ。汚名を一時ふ
雪ぐてハ。十餘年の憂月日も。算へて見まバ久方の天涯

日彩を今日仰ぐ。歓喜面に顔をしゝ然もこそあまと
王も后妃も。傍近く徴めひ。種々に慰めひぬ。恵て世尊い
御母の。霊位を祀る輿に。諸羅漢と倶に陀羅尼を誦し。般
若を行ひて帰ひぬ。偉終りて淳仮王い。如来師尊に奇
を供へつ。歓喜ひにこと限りあ。若宮い其日より。法華と
倣ひぬ。法名羅睺羅と号ひぬ

八宗綱要原稿迦實禄巻之四畢